

# セネガル共和国の音楽文化

## —タマに着目して—

平成 27 年入学  
派遣先国：セネガル共和国  
堀高 まなほ

キーワード：セネガル、音文化、伝統音楽、楽器、トーキングドラム

### 対象とする問題の概要

これまで、アフリカの音楽文化は、多くの研究者によって調査されてきた。たとえばフランスの音楽学者であるアロムは、中央アフリカ共和国において伝統音楽の音楽構造分析を行い、アフリカ音楽の特徴として語られることがあるポリリズムについて論じた [Arom 1991]。一方、音楽が生まれる文化的あるいは社会的側面についての研究は、多くの場合文化人類学者が担ってきた。日本人研究者としては鈴木 [鈴木 2000] や矢野原 [矢野原 2015] が、アフリカの都市に暮らす若者たちとの音楽を通じた関わりあいのなかで、そこから見いだされる社会状況の分析を行ってきた。このように、アフリカにおける音楽研究は、音楽構造の分析か社会状況の分析かのどちらかに偏ったものが多く、音楽と社会の両方を分析した研究は少ない。

### 研究目的

本研究は、セネガル共和国の伝統楽器・タマに注目し、それを用いて演奏される音楽の構造について分析するとともに、演奏者やその聴衆、さらに楽器の流通にかかわる人々をも調査対象とすることで、タマという楽器の社会的位置づけを明らかにすることを目的とする。

音楽構造の分析を行うにあたっては演奏の録音や採譜の作業を行い、リズムと音高の分析を行った。またより詳細な構造分析を行うために、調査者自ら楽器の奏法を習得した。

かつてタマはトーキングドラムとしての役割を担っており、この点を踏まえて社会的側面の調査を行った。携帯電話などの通信手段が発達することによって、タマの役割や聴き手の意識、また市場で売られるタマの流通経路に変化は生じたのだろうか。このような疑問をもとに演奏者や聴衆、さらに楽器の製作者に対してインタビューを行った。

### フィールドワークから得られた知見について

今回調査を行ったのはティエス州ンブル県に位置する N 町である。沿岸部には漁民レブの人々が暮らし、少し内陸に入るとセレールやソーセなどのさまざまな民族が生活するエリアがある。さらにその内陸側には派手な西洋風の家と建設途中の家が混在している新興住宅地が広がっている。N 町には、セネガルの多様な民族の人々に加えて、ヨーロッパのなかでも主にフランスから、結婚や別荘地として土地を購入したことを機に移住した人々が暮らしている。このように多様な民族と国籍の人々が生活する N 町の中心部では、夕方になると時折、太鼓の音がきこえてくる。

現地語のひとつであるウォロフ語で「タマ」と呼ばれる小さな太鼓は、セネガルの伝統楽器である。楽器の柱となる木のかたちは砂時計のようであり、その上下両面に皮が張られている。一般的な大きさとして、打面の直径は11cmから12cmほどで、オオトカゲの皮が用いられている。

奏者は利き手とは反対のわきの下にタマを挟み、利き手には先端が丸くなったバチを持って演奏する。バチを持っていない手の中指、薬指、小指でもタマの打面を叩く。また、両打面の縁全体に張られたヒモをその二の腕で締めたり緩めたりすることで打音の音高を変化させる。タマの音色の要素は、①バチによる音、②素手による音、③それらの音高の調整による音である。また、3つ目の要素である音高の調整は、セネガル全域の伝統太鼓には見られない特徴である。



写真1 タマ

現在、タマが演奏される場面は多岐にわたり、結婚式や洗礼式などの儀礼で演奏されるほか、道端で練習として演奏されることもある。先行研究で指摘されているような情報伝達のツールとして用いられる機会は減少し、タマの言語的な役割は薄れつつある。その一方で、タースと呼ばれる即興的言葉遊びやポピュラーミュージックの伴奏に用いられるようになっており、音楽的な役割を担う場面が増えている。



写真2 演奏の様子



写真3 製作の様子

### 今後の展開・反省点

今回の調査では、タマの演奏者と製作者への聞き取り調査は計画的に実施することができたが、聴衆への調査は十分に行うことができなかった。次回はしっかりと準備をして臨みたい。また、演奏技術の習得にはまだ多くの時間を要するので、今後も継続して学んでいきたい。

これまでのアフリカ音楽研究では、便宜上、西洋音楽の記譜法に則って記録してきた。しかし、アフリカ音楽、特に伝統音楽における音やリズムはその記譜法だけでは十分に記録できないということが、多くの研究者により指摘されている。今回の調査で収集した録音と映像データを用いてリズムと音高の分析を行い、西洋音楽の概念に捉われない新たな記譜法を考案したい。

## 参考文献

Arom, Shimha. 1993. *African polyphony and polyrhythm*. Cambridge University Press.

鈴木裕之. 2000. 『ストリートの歌—現代アフリカの若者文化』 世界思想社.

矢野原佑史. 2015. 「カメルーンの若者たちが望む世界—ヒップホップ・ミュージック制作現場から」 鈴木裕之・川瀬慈編『アフリカン・ポップス！—文化人類学者からみる魅惑の音楽世界』明石書店, 226-259.